

井上泰宏(いのうえ・やすひろ)

1986年生まれ 37歳

福岡県北九州市出身。大学卒業後ボートレース関係の会社に就職。2015年から日刊紙記者として若松ボートを担当後、20年から芦屋ボートに常駐。趣味は釣り。車のシート下に餌が転がり込んだことに気づかず、しばらく異臭を放ち続けたのがトラウマ。

職人のこだわり

8月浜名湖で史上5人目の通算3000勝を挙げた西島義則選手は、1981年11月のデビューから43年、9313走目での達成でした。そして次なる目標に定めた通算5000連対を9月の多摩川で達成。こちらは史上7人目の快挙でした。記者が担当する芦屋を走ったのは多摩川の次節。そこで祝福の言葉をかけると「ありが

no.16

大ベテランの記録ラッシュ

とう」と表情を和らげ応えてくれました。「長く走っているからね」とは言うものの、43年間も走り続けているのがすごいこと。5000連対に関しては「1万走以内にはなかった」と2連対率50%オーバーへのこだわりをのぞかせました。単純に2走に1回以上は絡んできたのですし、3連対率ももっと高くなるので、舟券への貢献度はかなり高いと言えます。その西島選手が次に迫っている

イケメン記者の大物の予感!



鬼気迫る迫力で悲願達成

以前から「そんなつもりはない

記録が通算1000V。芦屋、続く江戸川では優勝することはできませんでしたが、しっかりと優出。そして、続く桐生で99回目の優勝。10戦8勝と1着をズラリと並べ、実際に西島選手らしい結果で頂点に立ちました。「エンジン抽選からそうだし、優勝は巡り合わせもあるからね。24場制覇にはあとびわこと福岡が残っているんだけど、その2場も全く苦手だとかは思っていないんだよ。成績も悪いことはないと思うし、たまたま巡り合わせが良くないだけ」。10月末には福岡のGⅢマスターズリーグに出走。通算1000Vを飾って、24場制覇にリーチをかけていても何ら不思議はありません。

んですけど、若松に行く時は自然と気合が入っているんだと思いますよ。嫁さんから言われますもん」と語っていた西山貴浩選手が、10月2日が最終日だった若松の72周年を制覇！一般戦でもGIでもSGでも、常に気合パンパンで臨んできた純地元の若松周年優勝はまさに悲願成就の瞬間でした。取材に行ったのは4日目からで、その時にはもうバチバチ。口を開けばいつものように冗談を飛ばすのですが、その表情はピリッと仕上がっていました。

最終日は5日目までの向かい風から追い風に風向きが変わり、しかも強まる予報でした。ただ、優勝は風速1mの緩い追い風。準優勝後の公開インタビューで「中田達也がベタ水面にしてくれると思う」と語ったように、レース中の



西島義則



鳥本智史



西山貴浩

事故で亡くなってしまったかわいがっていた後輩が本当に力を貸してくれたのではないかと思えるほど絶好の水面でした。インタビュ―後にピットに戻ってきたタイミングで取材を行ったのですが、「もう泣きそう。準備は完璧なSが行けた。仕上がりで上の人はいるけど、もう関係ない。優勝戦も準備みたいに関係ない。優勝戦も準備

も変わるみたいだけど、それも関係ない。しっかりとSを行って逃げますよ」。本来ならボートレースファン、舟券ファンに推理を楽しんでもらうために、出足がどうか、伸びがどうかと細かく聞くべきなのでしょうし、普段はそうします。ただこの時は「これ以上は野暮だな。この気持ちも伝えないと」という意識になりました。それほど西山選手から疲労感とそれを上回る鬼気迫るほどのテンションの高まりを感じたのです。

人気×実力＝影響力？

そんな西山選手、やはり世間にも与える影響も大きくなっているようです。若松周年の2日後には、ボートレーサー養成所の入所式に行ってきました。数人ピックアップして取材を行う中で、目標とする選手に西山選手の名前を挙げたのが鳥本智史訓練生です。いとこである中野孝二選手とは「普段から2人で一緒にゲームをしたりする兄弟みたいな関係」ということですが、強く魅力を感じたのが西山選手だそうです。「最初は開会式や勝者インタビューなどでの面白さで見ていたのですが、それだけじゃない部分も見えてきてより憧れるようになりました。若松周年でもそうでしたが、特に中田達也元選手のことを話しているところを見て人間性が素晴らしいと感じています」。おちゃらけたキャラクターと巧みなトークやパフ

オーマンスが目立ちますが、「ボートレーサー西山貴浩」の魅力はそれだけではありません。人気に実力、結果と伴って、いまや立派なボートレース界を代表する選手です。

『4周1M』での珍事件

最後に若屋での珍事件を……。10月19日に幕を開けた4日間開催の「DMMボートちゃんねる杯」を走っていた大原祥昌選手が、2日目11Rの6号艇で3着に入線。予選3走の着順は1着1本、3着2本でした。予選突破を決めた……かと思われました。11Rの6着までの着順をメモしていたところでピット内に「転覆艇あり」の放送がかかりました。我々記者も他の選手たちも「え？ 転覆なんてあった？」とポカンとしていると、1Mにうかが6号艇のボートが。4周1Mとで言いましょうか、ゴ―



大原祥昌

ル後にピットへ戻る時に「引き波に乗ってボートが跳ねてしまった時に思い切り風をはらんでしまっただけ、そこからは何もできずにひっくり返ってしまいました」と強い向かい風にあおられて転覆してしまっただけです。この節が期間最終節だった大原選手の勝率はこの時点で5・45に。優出を狙ってももちろんですが、5・44辺りで推移していたA2級勝負駆けでもあったので「何とか走りたいと思っただけです……。すみません」と腰を痛めてしまい無念の途中帰郷。この原稿を書いている10月25日時点ではボーター以上ながら、微妙なところでもあります。不注意とも不幸ともいえる4周1Mでの転覆。あとはなるようにしかありませんが、大原選手のA級初昇格なるかにも注目しながら今期の残り数日を過ごします。